



監督＝クリス・コロンバス／台本・作詞・作曲＝ジョナサン・ラーソン／出演＝アダム・バ  
 スカル／アンソニー・ラップ／ロザリオ・ドーソン／テイ・ディグス／ジェシー・L・マーテ  
 イン／ウィルソン・ジェレメイン・ヘレディア／イディナ・メンゼル／トレイシー・トムス  
 (ブエナビスタ インターナショナル (ジャパン) 配給／2005年アメリカ映画／135分)

……ブロードウェイで大ヒット中の若者向けミュージカル(?)の映画化だ  
 か、その現代的テーマの激しさとボヘミアン達の生きていく姿勢には誰もが  
 圧倒されるはず……。『マイ・フェア・レディ』や『サウンド・オブ・ミュ  
 ージック』と違って、自分で口ずさめるような歌ではないが、セリフが極端  
 に少なく、ハードでロックンロールな歌声が充満するスクリーンにはただ、  
 感動あるのみ……。

## ブロードウェイ・ミュージカルの数々……

この映画はブロードウェイ・ミュージカル『RENT』を映画化したものだが、  
 ブロードウェイ・ミュージカルといえば、1960年に死亡したオスカー・ハマース  
 タインⅡ世と1979年に死亡したりチャード・ロジャースの2人がつくった名作が  
 有名で、『サウンド・オブ・ミュージック』『南太平洋』『王様と私』『マイ・フェア  
 ア・レディ』などは楽しいストーリーであるうえ、一度聴いたら耳に残る名曲が  
 多い。したがって、何度もLPレコードを聴き歌詞を見ながら練習した私にとっ  
 ては、数曲は歌える曲もある。また『オペラ座の怪人』は新幹線の中でよくMD  
 で聴き、少しは覚えている。

## 圧倒的な迫力のロック音楽

ところが、このミュージカルの音楽は耳に残るという点では同じだが、残念な

がらとても自分で覚えて歌うわけにはいかないものばかり……。それはなぜかという、そのほとんどが若者向けのハードな曲でロックンロール調の音楽ばかりだから。

かつて『ウエストサイドストーリー』がミュージカル音楽とダンスを革新したように、この『RENT／レント』の音楽は、それまでのミュージカル音楽に現代的な革新をひき起こしたようなもの……。

## 『RENT』の日本版は？

ミュージカル『RENT』のブロードウェイでの上演は1996年からだが、2005年時点で4000回を超え、史上8番目のロングランになっており、世界各国での公演も行われているとのこと。したがって、当然その「日本版」も上演されているが、私はちゃんとそれを2000年5月にシアター・ドラマシティで鑑賞した。もっともその日本版を観た時は、「こんなものか……」と思っただけで、大きく感動することはなかったため、私の採点表では星2つにとどまっていたが……。

## 偉大な作曲家に合掌……

なお、今回パンフレットを読んでではじめて知ったのは、このミュージカルの台本・作詞・作曲をしたジョナサン・ラーソンは、プレビュー初日の前夜に大動脈瘤破裂のため35歳の若さで突然この世を去ったということ。「たった1曲でいい、自分の納得できる音楽を生み出せたら僕は死んでもかまわない」という、映画の中の元人気ロックバンドの一人、ロジャー（アダム・パスカル）の言葉を自ら体現してしまったというわけだ。映画のラストの字幕に「THANKS TO JONATHAN LARSON」という字幕が流れるが、私もここであらためて合掌。

## ボヘミアンといえばカッコいいが……？

この映画の主人公は8人のボヘミアン。ボヘミアンといえばなんとなくカッコいいものの、そもそもボヘミアンとは、チェコスロバキアの「ボヘミア地方の」という意味。そのボヘミアンがなぜ「芸術家」という意味に使われるようになったのかは、百科事典などを見ればわかるが、そのルーツはボヘミア地方の民族衣

装や自由な放浪生活をするジブシーたちにあるらしい……。

ちなみに、このミュージカルの原型となっているのはプッチーニのオペラ『ラ・ボエーム』だが、それもボヘミアンという意味だということから驚き。何ごともきちんと勉強しなければ……。

今の日本ではボヘミアンという言葉はあまりピンとこないもので、多分多くの芸術家があこがれる言葉は「アーティスト」だろう。「歌手」などとダサイ名称で呼ばれることは誰も好まず、皆アーティスト気取りだが、ニューヨークでは、何といってもやはりボヘミアン……？

## 『RENT / レント』に見るニューヨークの不動産事情

このミュージカル映画のタイトルである『RENT / レント』とは、建物（部屋）の賃貸借契約における家賃のこと。8人の主人公のうち、ロジャーと映像作家を目指すマーク（アンソニー・ラップ）は男2人でアパートの一室（ロフト）を借りてそこに居住しているが、実は今は大家となっているベニー（テイ・ディグス）もそのルームメイトだった人物。そして、その階下に住んでいるのがクラブダンサーのミミ（ロザリオ・ドーソン）だ。あとの4人はどこに住んでいるのかよくわからないが、哲学教授のコリンズ（ジェシー・L.マーティン）はこのロフトを時々訪れていた様子。このロフトが8人のボヘミアンたちの溜まり場というわけだ。

## 賃料不払いはダメ……？

もっともいくらボヘミアンを気取っていても、家賃を払わず滞納していたのでは、契約解除、明渡しを請求されて当然。しかし2曲目に流れる『Rent』というアパートの賃借人たちが力いっぱい歌う曲を聴いていると、賃料を支払わず、団結して大家さんに対抗することが正しいような錯覚に陥りそう……。しかしそれはやはりダメ。法的にはあくまで大家であるベニーの言い分が正しいもの。そのうえ、ベニーは単に明渡しを求めるのではなく、若き芸術家たちが自由に音楽や映画を作れるような、マルチメディア・スタジオを作ろうとしていたのだが、それはロジャーたちには容易に受け入れられなかった。

## パフォーマンスライブによる抵抗は……？

ベニーが計画する「ホームレス立ち退き計画」に抗議するために、カリスマ的パフォーマンス・アーティストのモーリーン（イディナ・メンゼル）が計画したのがパフォーマンスライブ。その会場にバイクで乗り付けるという趣向で登場した主役のモーリーンは、何とも派手な歌と踊りによるパフォーマンスを見せてしっかりとアピール。しかし、会場いっぱい集まった参加者たちのすぐ側に控えているのは、大勢の警察官。これではちょっとした混乱が起これば大暴動になる可能性があるが、果たしてその予想どおり……？

## さまざまな現代的テーマの迫力は……？

この映画は、1989年12月24日のクリスマスイブから1990年12月24日までのニューヨーク、イースト・ヴィレッジを舞台にくり広げられる1年間の物語だが、ここでは貧困、犯罪はもちろん麻薬、エイズそして同性愛から同性婚まで、多様な現代的テーマを取りあげている。そしてすごいのは、それらについてキレイ事の問題提起をするのではなく、それらの問題に真正面から向き合っていること。それらのテーマが8人の主人公それぞれの生き方を通じて観客の胸に響いてくる。以下少し長くなるがそれぞれのカップルに注目しながらその各論を……。これを観れば、音楽だけではなく、この映画が描いている各論の現代的テーマの迫力に圧倒されるはず……。

## 各論1——エイズキャリア同士の結婚は？

アフリカや中国でのエイズ感染の広がりや脅威だが、それはアメリカのニューヨークでも同じようなもの……？ この映画にはアル中患者たちが集まって互いの悩みや体験を述べ合うサークルと同じような、エイズ患者たちのサークルである「ライフ・サポート」が登場する。「ライフ・サポート」へいつも出席しているのが、コリンズとドラッグクィーンのストリート・ドラマーであるエンジェル（ウィルソン・ジェレマイン・ヘレディア）。この2人は、ロジャーのロフトを訪れたコリンズが強盗に襲われて倒れこんでいるところをエンジェルが助けたこと

によって、運命的な出会いに気づき、たちまち恋に落ちることに……。哲学教授だけあってコリンズは、8人のボヘミアンの中でもっとも大人の雰囲気を漂わせている。また8人のボヘミアンの求心力になっているのがエンジェルだったが、しだいに彼女のエイズの病状は重くなり、ある日遂に……。この2人の運命的な出会いとエンジェルの死亡は、この映画に登場するカップルの中で最も悲劇的なストーリー……。

## 名論2 —— はじめて見る女同士の結婚式は……？

第2は、自由奔放な性格で恋人を振り回すモーリーンとハーバード大学出身の女性弁護士ジョアンヌ（トレイシー・トムス）との女同士のカップル。ジョアンヌはかつてマークの恋人だったが、どうもうだつのあがらないマークはジョアンヌに捨てられ、ジョアンヌはモーリーンに走った様子……？

女性弁護士でありながら、ジョアンヌがなぜボヘミアングループに入っているのかよくわからないが、多分これはモーリーンの魅力にまいったせい……。仲間たちの前で示す女同士の同性愛のアツアツぶりも興味深いですが、それ以上に面白いのは、私がかつてスクリーン上でみた女同士の結婚式。日本では同性婚は御法度だが、アメリカでは州によってはオーケーとされている。しかして、先進的な(?) ニューヨーク州で、2人はめでたく結婚式を挙げようとしたのだが……。

そこで露呈されたのは、お互いの性格の不一致。誰がみても理知的な女弁護士のジョアンヌと奔放な恋多き女モーリーンの2人は水と油、両極端の性格では合うはずがなく、相性がいいのはセックス面だけ……？

同性同士の結婚式の有り様とそのケンカ別れの有り様、そしてその後の2人の微妙な距離感をみていると、やはり女同士の結婚は難しそうだと言わざるをえなかったが……。

## 名論3 —— 音楽家とダンサーの恋は？

かつては人気ロックバンドの一員だったが、エイズを苦にガールフレンドが自殺して以来、全然曲を書けなくなったロジャーは、今やマークとともにロフトの中に引きこもり状態。そしてロジャー自身もエイズに侵されていたため、新しい

恋をすることにも消極的……。

他方、ナイトクラブのダンサーであるミミは一面セクシーで華やかなショーを演じているものの、彼女もエイズ患者。ロジャーのロフトの階下にミミが住んでいることを知ったロジャーは心をときめかせ、ミミもロジャーに対して好意を示したが、エイズのため恋に臆病になっているロジャーは、ミミからの積極的なアプローチを拒むというバカな態度を……。

それによって2人の恋は終わってしまったと思ったのだが、ある日ある時、抗エイズ薬投薬の時間を知らせるベルが2人同時に鳴ったとき、はじめて2人は心を許せることに気づき、あついキスを交わしたが……。

人間の嫉妬心というのは男でも女でも同じで、実にやっかいなもの。ミミが大家のベニーとある時一緒に食事をしたと聞かされたロジャーがとった対応は……？ あちらに揺れ、こちらに揺れる2人の恋模様のサマは、この映画の見どころの1つ。

## ■各論4——マークとベニーは？

8人のボヘミアンの中で一見まとも(?) そうなのは、ドキュメンタリー映像作家を目指しているマークと、以前はロジャーとマークのルームメイトだったが、資産家の娘と結婚したことによって今はロフトの大家となっているベニーの2人。しかし、その内面の悩みは他のボヘミアンと似たようなもので、マークは自分の求める芸術と商業主義との兼ね合いで悩んでいた。しかし滞納したレント(家賃)を支払うため自作のフィルムをテレビ局に売り込むと、すぐにそれを買ってくれたのだから、その才能はなかなかのもの。しかし、その後のマークの生き方は……？

他方ベニーは、友人たちからの「裏切られた」という反発とロフトの明渡し請求を求めることの真意を理解してもらえないことに大いに悩んでいた。しかし、ロジャーとミミの仲が険悪になるにつれて、少しずつベニーの出番が……。

スクリーン上から観る限り、彼は決してボヘミアンたちを裏切った悪い奴とは思えない。麻薬におぼれ失踪したミミを捜すについても、彼はロジャー以上の努力を……。

## ボヘミアンたちを次々と襲う不幸は……？

ひどいことに、もともとミミはエイズの他に麻薬中毒という二重の問題を抱えていた。そのためロジャーとの仲が怪しくなるにつれて、それが次第に重症に……。そして遂にミミは、失踪して行方不明になってしまった。

そこでロジャーにかわってミミの搜索に努力したのはベニーだったが、さてロジャーの真意は……？

この映画の最後の物語は、ヤク中によって死にかけたミミがロフトの中に運び込まれ、まさに息絶えようとするシーンから。これを観ていると、今やかつての結末を失いバラバラになってしまったボヘミアンたちは、いよいよこれで終わりかなと思ってしまうが、実はその後に意外な展開が……？ やはり暗いままでジ・エンドになったのではダメで、ハッピーエンドにしなければ……。

2006(平成18)年3月31日記

### ミニコラム

#### 学生時代のレント生活は……？

1967年4月から始まった私の学生時代は、かぐや姫の『神田川』や『妹』そしてバンバンの『いちご白書をもう一度』の世界そのもの。

もっとも、フロ・トイレの共用は同じだが、東京では3畳1間に対し、大阪では6畳1間のアパートが相場。4年間続いた私のそんなレント生活は、後半は孤独な司法試験勉強の場となったが、前半はもっぱら議論の場。集まる友人は、学生運動活動家からノンポリ学生まで幅広く、また議論のテーマも革命論、学生運動論から文学論、恋愛論まで多種多様。中には私のアパー

トを「同棲生活」の拠点に据えたカップルまでも登場した。興が乗ってくれば、議論が夜を徹したものになることもしばしば。良くも悪くも私の学びの場は大学の教室ではなく、このレントにあったことは明らかだ。したがって、今考えてみれば、当時数千円のレント代の価値は計り知れないもの。

今ドキのフロ・トイレ・冷暖房完備のワンルームマンションでは、逆にこれほど「充実」したレント生活はちょっと無理……？

2006(平成18)年8月16日記